

『ソ連兵へ差し出された娘たち』

2022年05月16日

私は1941年に旧満州大連市で生まれた。1947年の2月に帰国したので、中国での生活を断片的にだが記憶している。中国残留孤児問題が注目された時、残留孤児らはちょうど私と同じ年頃であった。私の家族は港町・大連市に住んでいたのだから、順番が最後になったが、皆で帰国することができた。中国の内陸部に開拓団として入った人たちは参戦してきたソ連兵に襲われ、恐怖の中、必死の逃避行を強いられ、多くの死者を出した。親を失い戦災孤児になり、中国人に育てられた子どもがいた。また、子どもを連れて帰国することができなくなり、中国人に託さざるを得なかった人たちもいた。在留孤児、残留婦人の問題には、私自身のことのように関心を持った。また、開拓団の悲劇的な逃避行に涙した。

帰国しようとしていた黒川開拓団はソ連兵に娘たちの性を提供することによって、団の生存を図った。長く隠されていたが、何年か前、実情が公に報道された。ノンフィクション作家の平井美帆氏が、この事実を克明にリポートした『ソ連兵へ差し出された娘たち』を上梓している。文芸評論家の斎藤美奈子氏が絶賛し、法政大学元総長の田中優子氏、ドキュメンタリー作家の森達也氏が推薦しているならば、読まない訳にはいかない。

日本は1932年に、清朝最後の皇帝溥儀を元首とする「満州国」を成立させた。満州国の広大な領域に、疲弊した農村経済の再生と作物増産を目指し、27万人が満州開拓移民として送られた。移民した農民たちは自分の土地を得、苦勞しながら仕事に励み、それなりの成果を得ていった。しかし、時局は悪化し、開拓団の成人男性たちは南方の戦線に召集されていった。関東軍は弱体化し、開拓団を保護することはなかった。中国人から襲われるようになり、ソ連は「日ソ中立条約」を破棄し、満州国に侵攻してきた。ソ連軍の暴虐は、言葉にならないほどの惨劇をもたらした。強奪、強姦、虐殺、逃げられない苦悩に耐えかね、集団自決が起こった。開拓団は国家から放置され、棄民として、地獄を体験した。ソ連兵が強奪に来る、女性を求めて凌辱する。娘がソ連兵に連れていかれた時、父親は何の助けもできない。娘は父親を振り返って、《私は見た / 父のにぎりこぶしに / なみだ一滴》の光景が脳裏に焼き付いた。

岐阜県黒川村では、662人が開拓団として入植した。黒川開拓団も逃避行を重ね、同じような道筋を辿っていった。開拓団を率いる人が、ソ連兵に娘たちを「接待」に出すという提案をした。このままでは集団自決をするしかない。出征兵士の家族は守らなければならない。団の生存のために、娘たちの性を提供するという訳である。ハチの巣をつついたような混乱が起きた。「嫌だ一嫌だ一、お嫁にいけなくなっちゃう」と泣き叫ぶ娘もいた。しかし、「自分の命を捨てるか、開拓団の皆さんをお救いするかは、娘さんたちの肩にかかっていると自分は思ったんですね。それでなんとしてでも日本に帰りたいから、命を救いたいからということで」と、「接待」を涙ながらに、15人の娘が受け入れていった。年齢によって「接待」と「洗淨係」に分けられる。「接待」をお茶くみや部屋の掃除と理解した娘もいたという。「接待」させられた娘たちの苦渋に満ちた闘いがあった。彼女たちによって、ソ連兵からの強奪、強姦は収まったらしい。

黒川開拓団の人々は全員、無事に帰国できた訳ではない。発疹チフスに罹って、責任ある人々が高熱で亡くなった。足手まといになると、自ら食を断ち、死んで逝った人もある。また、中国共産党の八路軍の兵隊と遭遇したり、日本への帰国を目指す元日本兵とも出会い、助けられたこともあったが、女性の性を代償に、安全を確保せざるを得ないことが続いた。その間、二百数十名が命を落とし、異郷の地で眠りに就いた。耐え難い苦痛と恥辱

に耐え抜いた彼女たちの犠牲によって帰国できた。その中で、「接待」役を務めた「善子さん」は年下の子どもたちをかばい、数多くの犠牲を引き受けた人で、帰国後、当時を思い「乙女の碑」と題する詩を書き遺している。

《隣の村の / ウジャジャンは	全員自決で / 散り果てぬ
明日は我が身の / 消える日か	両手合わせて / 死ぬを待つ
乙女の命と / 引き換えに	団の自決を / 止める為
若き娘の / 人柱	捧げて守る開拓団
ああ忘れぬ / あの時の	思い出語る / 乙女会
尊き命 / 捧たる	あの娘の悲しみ / 誰が知る
蒼のままに / 散る定め	泣いて明かした / 満州の
本部の窓に / 残る月	今尚癒えぬ / 心傷
傷つき帰る / 小鳥（娘）たち	羽根（心）を休める / 場所もなく
冷たき眼 / 身に受けて	夜空に祈る / 幸せを》

帰国した彼女たちは、満州帰りの傷物として蔑視された。戦後、ソ連兵の凶暴さは伝えられていた。男たちは「あのねえ、男の気持ちってのはねえ、自分でいいようにやってもよ、要するに新しいのが欲しいの。独占欲が強いのだ」と言った言葉のように、処女性にこだわった。満州帰りの彼女たちは冷たい目で見られ続けた。黒川開拓団の人々は、満州で何があったかは黙し、彼女たちは忍耐強く自分の人生を切り拓いていった。

1981年6月に、黒川村の遺族会は引き揚げ後、初めて中国へ慰霊の旅をした。激しく心を揺さぶられ、「慰霊碑を建てよう」と募金活動を始めた。同年11月に「乙女の碑」と名付けられた石地蔵が設置された。しかし、過去の出来事を知られるのを恐れ、名前などは出さないでほしいと言う要望があり、何も刻まれていない。「乙女の碑」という名前が、憶測や関心を呼ぶようになり、様々な気持ちが行き交った。前記の「善子さん」は「碑」の建立を願い、上記の歌を歌っている。そして、彼女は、自分たちの痛ましい経験を語るようになった。社会は、彼女たちの犠牲を知らされた。

彼女たちの犠牲をどう受け止めるか。団の生存を守った美談とも言えよう。従軍慰安婦は男の女に対する蔑視、差別が女を慰安の対象にした。ソ連兵に「接待」させられた娘たちも同じ扱いを受けた。彼女たちの受けた傷について、「減るもんじゃない」という心無い言葉が浴びせられた。彼女たちの死ぬまで持ち続けた痛みが受け止められない現実がある。戦争で兵士たちは死をかけて戦い、殺気立ち、刹那的である。そこでは、暴力的に女性を求めることが起きる。どの戦場においても、戦争は性に関し、理性を逸脱した狂気が走る。女性を性の道具にする戦争は起こしてならない。

私は、国家の犯罪と見る。満州国は日本の侵略以外の何ものでもない。侵略した土地に開拓団を入れ、農地を与えた。そこでは、中国人に対する蔑視が甚だしく、日本人であることを恥じ、中国人村に逃げ込んだ人がいたくらいである。開拓団の男は召集され、開拓団を守るべき関東軍はいなくなり、孤立無援になり、彼女たちの性の提供によって、生存を確保したのである。この責任は国家にあるのではないか。「接待」させられた彼女たちは女性への蔑視が生み出したものであるが、根本的原因は、移民を棄民にした国家にある。だから今、私たちは国家のあり様に目を見張っていなければならない。

5月15日は「沖縄返還50周年」である。宜野湾市出身の元山仁士郎氏はハンガーストライキで、辺野古新基地建設断念を訴えた。彼とどう関わるか、国民は問われている。